KOTONONE SPECIAL ISSUE 1

特集 1

ユニクロの☆星。

就労事例ルポ

田巻英士君が、「バックルームのエース」になるまで。

今からお話しするのは、
ある障害者が仕事を得て、
職場で輝く「星」になるまでの物語。
自分に、何ができるのか。
自分には、何が向いているのか。
自分は、何者か。
仕事を探し、働こうとする時、
誰もが向き合うことになるそんな問いに、
田巻英士君も向き合い、
そしてその問いを乗り越えようとしている。

働くって、こういうことだ。
働くよろこびって、ここにあったんだ。

編集部＝文
text by Kotonone
信澤邦彦＝写真
photograph by Kunihiko Nobusawa

朝ご飯は、いつも少なめ

三月二〇日。くもり。四月中旬の暖かさ。時刻は午前七時少し前。東京・町田市の田巻家は朝食の時間。やわらかな光がさし込むダイニングテーブルに、スクランブルエッグ、野菜、お味噌汁。田巻英士君のお椀に盛られたご飯は、ほんの少し、一口分だ。「緊張するとお腹が痛くなるので、いつも朝ご飯は少なめなんです。でも今日は取材があるから、いつもより、もうちょっと少ないかな」とお母さん。「飲み物がほしいな」という田巻君に、オレンジジュースを渡す。

お父さんは、朝食を食べ、そのままダイニングに座ってシェーバーでひげをあたっている。田巻君もすぐに食べ終え、お皿を持って台所へ。自分の食器は自分で洗って片付ける。歯を磨き、二階に上がってかばんを用意したら出発だ。あ、その前にお母さんが作ってくれたお弁当を忘れないようにしないと。お弁当はいつもお母さんが作ってくれる。最近は田巻君も週一回、自分で作るようになった。

デミオに乗って、行ってきます

七時一五分。「行ってきまーす」。玄関を出て、通りを挟んだ向かいの駐車場へ。愛車・デミオに乗って自宅から一〇キロほど離れた、ユニクロ横浜都岡店へ向かう。国道一六号線はいつも渋滞。だから抜け道を使う。車好きのお父さんの熱心な指導のせいか、田巻君のハンドルさばきは、まるで自動車教習所の教官みたいに正確で安定している。ハンドルを握りながら「お母さんは心配してたけど運転に不安はないです。あ、一度だけ台風が来た時は怖かったけど」と笑う。

八時二〇分。ユニクロ横浜都岡店に到着。駐車場の奥のほうに車を停めると、先輩の斎藤さんもちょうど車を降りるところ。「おはよう！」「おはようございます」。一緒に店の中へ。さあ、今日も忙しい一日が始まる。

心地良い疲れと明るい表情と

田巻君の車を通りまで見送ったお父さんとお母さん。お父さんは「おかげさまで毎日楽しんで通っています。仕事から帰ってきて話を聞いていても、飽きてきたとか疲れたとか、愚痴や泣き言は一切言わないですから」。

「体の疲れはあると思うんです。でもそうなるまでには、紆余曲折があった。お父さんもお母さんも、もちろん田巻君も。戸惑いながら、時に苦しい思いもして、今の充実を手にしている。

掃除の場所が二カ所に増えた

八時三〇分、出社してすぐ、田巻君はほうきとちりとりを持って店の外へ。建物外にあるトイレと店の周り、そして広い駐車場の掃除が田巻君の担当だ。入社したばかりの頃、掃除の段取りを覚えるのは大変だった。「竹内さんに掃除の手順を書いたカードを作ってもらって、必死で覚えました」と田巻君。「竹内さん」とは、田巻君を支え、ユニクロへの就労を支援してくれた社会福祉法人ウィズ町田就労支援センター「らいむ」の職員、竹内広美さんのこと。手順のカードを作ってくれただけではなく、状況の変化に対応することが苦手な田巻君のため、ローテーションだった掃除当番を、田巻君だけは固定にしてもらうように掛けあってくれたり、他のスタッフと田巻君とのコミュニケーションのきっかけづくりをしてくれたりと、「ジョブコーチ」として田巻君が職場環境に慣れるためのサポートをしてくれた。

今では掃除にもすっかり慣れた田巻君。「掃除の場所も、外だけじゃなくもう一カ所、店内の床のモップと掃除機がけをするようになったんですよ」と笑う。

「必要な我慢」か、「親のエゴ」か

両親が、田巻君の障害特性をはっきり意識したのは、小学校の時だった。「成長が遅いことはわかっていました。でも、学年が上がるにつれて学習や集団生活の中で難しい場面が増えてきました。それで、六年生の時に『LD協会』に相談に行きました」とお母さん。LD（学習障害）との判定を受けたものの、小・中学校は普通学級に通い、高校は「サポート校」と呼ばれる、学習支援を行う普通科に通った。「親としては、ちょっと歩みは遅いけど『普通』の世界で一生懸命進んでいってもらいたいっていう思いがありました」とお母さん。「あとから考えれば、親のエゴとか見栄、ということになるんでしょうね」と振り返る。

人生って、いいことばかりじゃない。時

父・真さん、母・いづみさんと。

には、ぐっと我慢しなければならないこともある。それが成長や変化につながると信じる。まして「人と違う特性」を持っているとされるわが子のことを思えばこそ、期待もし、その裏返しとして厳しいことも言う。それを「エゴ」の一言では片付けられないだろうとも思う。しかしいずれにせよ、高校卒業時に田巻家が下した決断は、結果的に田巻君を苦しめることになってしまった。

苦しかった専門学校時代

「卒業後、自動車整備士の専門学校に行くことを勧めたのは私なんです」とお父さん。「私が車好きだったもので、息子にもあっているんじゃないかと思って」。簡単な整備くらいはできるというお父さん。息子にもできるのでは、という期待の裏側には、自立への願いがあった。「芸は身を助ける、じゃないけど、やっぱり何か技術を身につけてほしい、と思ったんです」。人とのやり取りに課題を抱えていた田巻君。コミュニケーション能力を要求されない技能を身につけることができれば。そんな思いからの決断だった。

しかし、健常者と同じスピードやテンポで複雑な整備の工程を理解し、作業することは田巻君にとって非常に難しかった。「学校では、決まった時間の中でどれだけきちんとできるのかを常に求められました。英士は『何分でやれ』と言われるとパニックになってしまって、逆に何もできなくなってしまいます」とお父さん。例えばタイヤを外して、もう一回組み立てる。そんな工程でも田巻君は人一倍時間がかかる。健常者と常に比較される状況の中での作業は、大きなプレッシャーとなってのしかかる。

大きな決断。障害者手帳取得

何よりもお母さんは、田巻君の顔から表情が消えてしまうことを恐れた。「顔が暗い。表情がどんどんこわばっていくのがわかりました。つらいんだけど、優しい子だから親の期待を感じてがんばっちゃうんです。でも無理をしているから、それが顔や体に出てしまう」。このままでは田巻君は「壊れて」しまう。そう思って先生に相談した。「車の整備は、人の命を預かる仕事。正確さとスピードが求められます。一生懸命やっているのはわかるけれど、仕事として考えるのは難しいのではないか、と言われました」。やはり続けることは無理だ。一年で専門学校を辞めることを決断した。

そして田巻家は、もう一つ大きな決断をする。障害者手帳の取得だ。

袋剥きのスピードスター

「田巻くーん、袋剥きはいいから、先に蛍光灯の掃除、やっちゃおうか」。斎藤さんからの指示で突然の作業変更。本来なら掃除の後は「袋剥き」の作業が田巻君の仕事だった。しかし斎藤さんの判断で、汚れていたトイレの蛍光灯カバーの清掃を先に済ませようということになった。

田巻君は臨機応変に対応する。すぐに雑巾を持って先ほど清掃した建物外のトイレへ。拭き掃除を済ませると店内にとんぼがえり。先に別のスタッフがやっていた袋剥き作業をサポート。田巻君が入ったとたん、明らかにぐん、とスピードが上がった。袋剥きは、ダンボールから出した商品を店舗に陳列できる状態にするために、ビニール袋から取り出し、薄紙やピンを取ってサイズ順に並べ直す作業だ。商品によって異なるピンや薄紙のあり、なしを全てわかっているかのようにスムーズに作業していく。

「あと五分で終わりまーす」。作業完了の見込みを伝える声も自信たっぷりだ。もともとは数字を扱うことや、時間に追われることが苦手だと聞いていたが、全くそんな印象はない。むしろ他の誰よりも自信を持って作業をし、見込みを立て、それを伝えている。

「こっちの世界」との出合い

障害者手帳の取得は、専門学校の件をLD協会に相談しているとき、担当の先生から勧められた。「正直言って抵抗はありました。どうにかならないかと思って、他の職業訓練校のようなところを見に行ったり。今まで『普通』に生きてほしいと思ってやってきた。手帳を取ったらこっち（障害者）の世界に切り替えていかなきゃいけない不安があって。でももう今までのようなやり方を続けてはいられない。この子がこの子らしく生きていくためには、ここで決断するべきかな、と思って」とお母さん。友人の「手帳は人を差別するものではなく、社会で生きやすくしてくれるもの」という言葉にも後押しされた。家族で話をして、悩んで、考えた。二カ月くらいかけて決断した。そして二〇〇九年二月、田巻君は障害者手帳を取得する。

町田市役所の障がい福祉課には、担当地区ごとにケースワーカーが配属されている。障害者手帳を取得した田巻君は、地区担当のケースワーカーから就労支援センター「らいむ」を紹介されることになる。

田巻君は「できる子」

「らいむ」の竹内さんは、田巻君との初対面をこう振り返る。「とっても素直だし明るい。『できる子』だなってすぐ思いました」。

障害者の就労支援のプロとして実績を積み重ねる竹内さんは、両親や田巻君自身とは異なる視点で、田巻君のいいところを見つけていた。「就労という観点からは、挨拶がきちんとできること、約束が守れること、この二つが大事。田巻君は二つともできていたから、きっと就労はうまくいくだろうと思いました」。

ただし竹内さんは、田巻君には、就労活動に入る前に実績を積んでもらいたいと考えた。「面接を受けるときに、在宅からいきなり面接を受ける人と、就職のために準備を重ねた実績のある人だったら、同じレベルであれば実績のある人が採用されると思うんです」。そこで、竹内さんは田巻君に「らいむ」が所属する「社会福祉法人ウィズ町田」で運営している就労移行支援事業所「美空」で就労移行をすることを勧めた。川崎市の北部市場で野菜や果物のパッケージや袋詰め、仕分けの仕事。それまで目指していた自動車整備士とはまるで違う世界。しかし田巻君は前向きに仕事に取り組んだ。「車の整備とは全然違っていたけど、今までが複雑すぎたんで、一旦切り替えて軽い作業から始めて、だんだんレベルアップしていけばいいかなって」。その背景には「この先働いていかないと自分でもやばいな、って意識があって」という田巻君の危機感があった。「とりあえず自分でお金を稼ぐことを学んでいかないと」。

転機になった「美空」での体験

気持ちを切り替えて臨んだ「美空」での就労移行は、田巻君にとって転機となった。「『美空』でやっていたことは自分に合っていたみたいです。整備士の専門学校と同じで時間には厳しかったんだけど、仕事の内容は楽だったんで、パニックになることもなくて」。仕事の負担が減った分、気持ちに余裕が生まれた。余裕が生まれると、周りがよく見えるようになった。周りの人たちとコミュニケーションを取れるようになった。「職員の方ともよく話しました。一緒に働いている仲間にはいろんな人がいたんだけれど、みんなよく話しかけてきてくれました」と田巻君。「三つのグループに分かれて作業するんですけど、自分たちのグループが早く終わったら、隣を手伝ってあげたりとか、時間のあるときに新しい機械を使わせてもらったりとか。新しい世界に入るという不安があったのですが『美空』での経験は僕にとって自信になりました」。

ユニクロでの実習に参加

「美空」で働きはじめて二カ月ほど過ぎた頃、竹内さんがユニクロに応募しないか、と持ちかけてきた。「らいむからはすでに三店舗で雇用実績がありました。仕事内容や職場環境などある程度はわかっていた。田巻君のコミュニケーション能力があれば大丈夫だと思いました」と竹内さん。

一方の田巻君、少し戸惑いもあったよう。「最初は自分に合うのかがわからなくて。ユニクロみたいな大きな会社で働く『普通の人たち』とうまくやっていけるのか。『無理だろう』って思ってました。でも竹内さんもお母さんも勧めるので、実習だけは行ってみようか、と思って」。

ユニクロは障害者雇用に際し、本採用の前に必ず実習を行い、そこで適性を見極める。その二週間の実習に参加することを決意した。

実習があった七月は、繁忙期の入り口に当たる大変な時期。障害者の主な職場となるバックルームも在庫で埋まって、作業する場所がない。「とりあえず周りの人にどうしたらいいですか、って聞きながら少しずつ片付けていって」。無我夢中で実習期間を過ごし、この職場でやっていけそうな手応えを感じたのは、実習が終わる頃だという。「みんなでバックルームを磨いたんです。スタッフさんと話しながら作業してたんですけど、その時、ああうまくやれそうだな、って思って。何があったってわけじゃないんですけど、僕のことを受け入れてくれている、っていう実感がありました」。

親子の迷いを乗り越えて

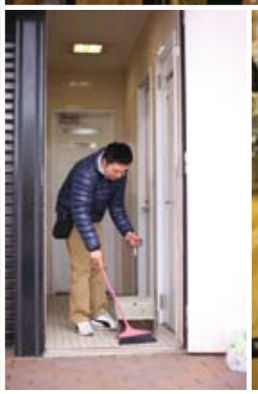
実習終了後、ユニクロ側からも入社を打診され、とんとん拍子に話が進むかと思われた。しかし実習から本採用まで時間が空いたため、持ち前の自信のなさから、田巻君の心に不安が広がってしまった。「『もう行かない』って英士が言い始めた時、私はどうしようかと思ったんです」とお母さんは振り返る。「今まで、親の意向を強く出して進路を決めていました。そのためにいろいろとあって、専門学校を辞めて、（障害者）手帳をとって、という今の道を選んだ。親としてはユニクロでがんばってほしいと思うけど、それを英士に今強く言うことが果たしていいことなのか。すごく迷いました」。

行かない、という田巻君とお母さんは、竹内さんを交えて「らいむ」で話し合った。田巻君が席を外した時、竹内さんはお母さんに「大丈夫だから、しっかり背中を押してあげて」と伝えた。「竹内さんがそう言ってくれたから『とにかく行ってみたら』と強く言うことができたんです」。竹内さんは「環境に馴染んだら、田巻君は絶対にうまくやれると思っていました。職場の環境作りは、私がジョブコーチに入れば、できちゃうことですから」と言う。

二人三脚で支えあって

「親は一番近くで子どものことを見ている、というけれど、それだけにわからないこともある。英士に何ができるのか、どんなことに向いているのか、わかっているようで全然わかっていなかった」とお父さんもお母さんも口をそろえる。そう、田巻君がユニクロに「自分の場所」を見つけるためには、本人の努力がベースになるのはもちろんのことだが、親と経験豊富な第三者による「二人三脚」が不可欠だった。

そして二〇〇九年九月、田巻君はユニクロに入社。その後の活躍は前述のとおりだ。「一番大きく変わったのは、本当に心からの笑顔になったことなんです」とお母さん。もともと田巻君は小さい頃は笑顔が魅力の「癒し系」だったという。それがいつの頃からか笑みが消え、こわばった、表情のない顔で日々を過ごすようになってしまった。「周りの人に支えられ、励まされて自信がついてきた。自信があるから、笑顔も変わったと思う」とお母さん。



田巻君がいない店は、考えられない

田巻君と一緒にユニクロ横浜都岡店で働く井上ゆみさんは「まるで自分の息子のような感じがしています」と言う。横浜都岡店で八年目になる井上さん、田巻君を入社時から見てきた。「とにかく穏やかでむらがない。仕事を覚えることにも前向き」とほめる。

井上さんが田巻君にとって「職場のお母さん」なら、斎藤和哉さんは「職場のお兄ちゃん」かもしれない。優しいだけではなく、時には厳しく指示を出し、田巻君をリードし、励ましてくれる。「一年くらい前から、田巻君と仕事以外で食事やカラオケに行くようになって、どんどん言いたいことを言いあえる仲になりました」と言う。井上さんと同じく入社時から田巻君を見ているが「仕事に対する意識が高いから、どんどんスキルアップしている」と評価する。「袋剥きやタグ付けなどバックルームの作業は、他のどのスタッフよりも正確で速い」そうだ。

井上さんも斎藤さんもそろって「田巻君のいない横浜都岡店は考えられない」と言う。「忙しい時でもバックルームに行くと田巻君がにこにこ笑っている。癒されるし、落ち着くんです」（井上さん）。「バックルームの業務に精通しているから、安心して任せて、こちらが売り場に集中できる環境を作ってくれるんです」（斎藤さん）。「夏休み、田巻君が長い期間バックルームを空けるとぽっかり穴が開いたみたいに寂しい」と井上さんは笑う。一カ月前に店長に就任したばかりの塩谷亜姫さんも「自分で工夫し、考えて仕事をしてくれます。店長の仕事のほとんどは『人』。スタッフの能力を活かし業績につなげることが求められています。田巻さんのような姿勢で仕事に取り組んでもらえることはありがたい」と信頼を寄せる。

これほどまでに職場に溶けこむことができるとは、田巻君自身も想像できなかっただろう。

障害者をお地蔵さんにしない

「障害者は『特別な人』ではありません。ですから職場で特別扱いすることはないのです」と語るのは、ユニクロを展開する、株式会社ファーストリテイリング総務・ES推進部の井上幸司さんだ。「もちろん配慮は必要です。ですがそれ以外は他のスタッフと同じく接するよう指導しています」。二〇〇一年、会長・柳井正氏の「社会的に認められない企業は生き残っていけない」「社会に障がいを持った方がいるのだから、雇用の機会を提供することは、企業の義務」という宣言に基づき積極的な障害者雇用を展開。二〇一一年時点で法定雇用率の一・八%を大きく上回る七・一九%の雇用を実現している。

雇用率、採用者数もさることながら、ファーストリテイリングが大切にしているのはその「質」、すなわちマッチングだ。「一番怖いのは障害者が『お地蔵さん化』してしまうこと。業務に貢献できず、周囲から『腫れ物扱い』され、お地蔵さんのように飾られてしまうのでは、障害者雇用の意味はありません。特別扱いしないという意味は、きちんと『戦力』として会社に貢献してもらうということ。そのために採用と配属には気を使っています」と井上さん。先述の通り本採用の前には実習を行い、働きぶりや人となりが環境に適応しているかを見極める。また「らいむ」のような就労支援機関と連携し、ジョブコーチ支援事業なども行いながら職場環境にフィットするまで、きめ細かくケアする。受け入れる店舗の店長に対しても、どんな人材が欲しいのかをヒアリングし、推薦する障害者の「いいところ」を実習の前に伝えておくなどのサポートを行っている。

「最終的な目標は、障害者がいきいきと元気に働けるような障害者雇用を目指すこと」と井上さん。「田巻君は弊社の障害者雇用の成功事例の一つですが、それは決してレアケースではありません」とも言う。そう、ユニクロでは今日この瞬間も、たくさんの「田巻君たち」がいきいきと働いているのだ。

「らいむ」の竹内広美さんと。笑いながらも手は止めない。

ユニクロの星は輝き続ける

一〇時四五分。売り場の準備が終わり、朝礼が始まる。田巻君を含め四人の店員が店長の前に集まる。昨日の売上、今日の目標などが店長から伝えられると、田巻君に「サンキューカード」が渡された。従業員同士がお互いに、してくれたことを書いて感謝の意を伝えあう。このカード、この日、田巻君は「ハンガーの色や出し方を教えてくれてありがとう」というカードをもらって嬉しそう。

朝礼の終わりにいつもの「ウイスキー」の唱和で笑顔を作って接客の準備。バックルームで接客はしない田巻君だけれど、本当に楽しそうに「ウイスキー」をやっている。「いつか売り場でお客様に商品をご説明したり、おすすめしたり。接客をやってみたい」。夢に向かって、田巻君、今日も笑顔で「ウイスキー」。

働くよろこびは、人とつながり続けるよろこび。励まされ続けるよろこび。そして、この世界の中で「自分の居場所」を感じるよろこび。田巻君は、今日も、明日も、働くよろこびを噛みしめ、よろこびを周りに振りまきながら、ユニクロ横浜都岡店の「星」として輝き続けるだろう。